

曆

第三号

平成二十年十一月発行

醍醐志万子

今日のなりゆき

もの言えぬ嘆きは深く轟くか西へ西へと車を駆りし

雨降るとわが待ちおれば裏山の笹をそよがす風出でにけり

雨降るととり込むもののその一つ洗濯物の白いはじむ

西日射す庭の夕ぐれ赤とんぼを追いし日ありと思ひ返しつ

西日射す庭にトンボの飛び交いて羽の光るにまなこをほそ

む

障害を持ちつつ励み作りたる紫のぶどうみどりのぶどう

「半分こ」と送りて賜びし塩昆布の香は立ちてきぬ開かん
までに

あんなことこんなこと過去として語る悔しき歯さえ磨か
ず

つかれ果てねむたきものと導眠剤のみてねむらんわれとの
会話

紫のぶどう大きくみどりは小さし種ありぶどういとしきも
のを

デーサービスに耐えられず帰り来し母の幼な子のごとき仕
草忘れず

疲れたら疲れたと云えがまんしてがまんして今日のなりゆ
き

西紀短歌会のこと



「西紀短歌会」の歌に「楽しみと歌作りいて新聞の投稿欄に載るを待ちおり」というのがある。「出とったね」、「見てくれたったん」。

丹波弁の応答である。

三十八年前、山本清子さんが来られて「歌を見てもらえないか」という申し出であった。新聞に出る歌などを見て、関心があつたのだろう。「私もボンヤリしていないで」ということになつたのだろう。会は公民館で行われた。当地の公民館は小高い丘の上にあつた。歌会はそこで開かれたので自転車をゴコゴコと漕いで上がっていった。

私が母の看護にかかわるようになってからは添削指導になつた。母はなくなつたが、そのあとは私が病人になり、長い添削指導へと変わった。皆が批評して私の添削指導で○が入っていると大よろこびらしい。会員はご近所同志で、そのにぎやかなこと。年長の会員は九十歳近いのではないか。元気で腰を曲

げている人が多いらしい。西紀短歌会からは毎年、三月の誕生日にお祝いのお花をいただいていた。佐倉に来てもういただかないと思つていたら、「花キューピット」で「胡蝶蘭」が送られてきた。千葉の天候には驚いた。あれから毎年マンションの窓辺で咲いている。今年で二年目である。

わが村の真中を貫く道ありて今日は觀光バスが通れり
本人も「村」と言い、「町」とは言わない。

詠歌舞の練師検定の合格は師と友の恩としみじみ思う
私は宗教に弱いのだが、わからぬことはない。

鳥たちの落とせし種より芽生えたる千両万両を鉢に移しぬ
正統派の歌。植物をなおもいたわる思い。

早春の陽ざしぬくかり縁側に机もわれも陽に添い移る
大き鏡のくもり拭いてこの朝を鬢引き詰めし顔と向き合う

歌会を提案した人。きりりとした感じが出ている。真面目である。
新年の初顔合わせに風船を放ちぬ今年の抱負を書きて

風船を放ったのは、旧西紀町の人々だろう。市ともなれば、行事も華やかになるが住民の意識はうすくなる。

真夜中にすごく吠えたるわが犬の朝より大き軒して寝る

飼犬への愛着の深さが思われる。声をかけたくなる。作者も私も。

紅梅の散りて咲きたる白梅の花びらさう吹き来る風が

美しい歌である。紅梅が先に咲き、白梅はおくれて咲き、すがすがしい。

初詣に会う人々の背を丸め足早に行く雪降る中を

会の中では歌歴の浅い方だが、「背を丸め足早に」と、よく詠われている。

風荒び籠るひと日は長病める友へ手紙のことばを探す

「お案じ申し上げます」、「お大事に」だけでは空々しくなる。

誰でも困るものだ。

空あおき梢に来鳴くうぐいすの声ききながら馬鈴薯うえる

「馬鈴薯」と漢字が目立って効果的。農業をよきかなとしみじみ思う。

手を休むる事なき妹の形見よと刺子の手提げ持ちて出で行く

亡き妹さんが手も休めず刺子をしていた。近い挽歌、遠い挽歌いろいろである。

友の声受話器を明るく通り来ぬ一人暮らしになれたるならん

「友」とあるから、この人も近ごろ、夫を失ったと思われる。

十三回忌の法要おえて香の匂い残れるときを夫は遠くも

早や十三回忌かと私もおどろく。

夫より十日先にみまかれば満中陰志の早々届く

西紀短歌会関係で今年は亡くなる人が多かった。

雪に籠りて読みいる歌集に今は亡き幾人のあり繰り返し

読む

作者の夫君がなくなられてから何年になるか。しみじみし

た感じが出た。

ひとつだけみのれる若子は初盆の子が乗りてくる馬とな

りたり

子息は画家であった。あちこちで遺作展が行われた。何首も

作られている中から、この歌を選んだ。

ちちははも夫も逝きし家の庭に季くれば年ごと花の咲き

つぐ

なつかしき顔ぶれ消えて故郷の葬りに集える村人を知らず
同じ地域に住んでいてさえ、知らぬ人がある。

母の亡きふた月余り過ぎし今季節はずれの軸はそのまま
どんな軸だったのかと想像される。

歌会には皆さん、よい歌を選ばれてくる。ただ、いつも同じ
傾向にならぬようにすることが大事です。これは難しいこと
ですが。

西紀短歌会も若い方が入って来られました。大いに期待して
います。毎年、作品集を出され、感服しています。

ご健詠をお祈りします。

平成二十年九月六日

醍醐志万子

歌稿ノートより



デッサンノートより



手に重き本

シクラメン長く咲きにし花のあと持て来て賜びしすずらん涼し

アマリリスは何色ならんと見ることの数日過ぎていまだも蕾

たちまちに夕焼けの色うすれゆきひとつどころにともしびの色

またわれはすべてに負けて言いわけの言葉を探すいねてる間も

人間のさびしきときにひとの水さえのどをうるおしかねつ

酒、煙草止めずたちまち死にし父商売下手を子らに残しぬ

手に重き本は遠ざけまたしても見ており木の絵花の絵

細書きのペンがこたえてかなわねば濃ゆくて太き鉛筆さがす

千島にて戦う歌を遺したる矢代氏のことも忘れいにけり

矢代さん、大村、落合、秋岡さん、愛育みて死にしいちにん

かずかずの思い出のなかにぎやかなヤツと先生笑いたまいき

遠ざかる空気の尻尾もう見えず苦しきねむりの中に落ちゆく

次々と思い出しぬ白蘭と紫蘭の花の群れ咲ける庭

デッサンノートより





二〇〇七年正月、佐倉のマンションで

あとがき

私の歌は、またしても働ける者の歌、働きて来し者の歌と
いうことである。しかし、どうも「働ける」とは認めてもら
えなかったようだ。座っている、即、遊んでいるとされる。

書道はまだしも、短歌（うた）など、ついに理解されるこ
とがない。女性の間で短歌クラブのできたのは何よりであつ
た。男性もまれに入ってくる人があるが、男性は指導者向き
にできているらしく長つづきしない。

女性は新聞に出て読まれるのをささやかなよろこびとして、
腰を曲げながら励んでいる。その中で連帯感も生まれた。

（この個人誌「暦」第二号、第三号は二〇〇八年九月十七日に死
去しました姉・醍醐志万子が生前、ベッドで書き遺した短歌と文
章を妹弟が整理し、そのまま収録したものです。）

発行所

（削 除）

醍 醐 聰